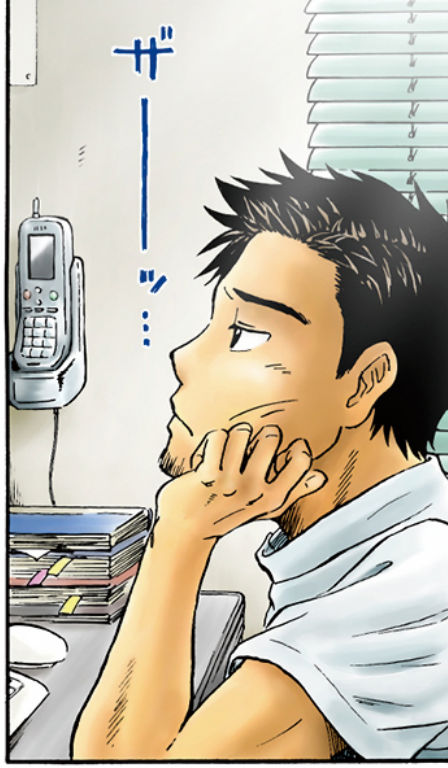
フィジカルメンテナンス

R-18
ADULT ONLY

Physical Maintenance



朝から降り始めた雨は、徐々に雨足を強め、昼過ぎには本降りへと変わりつつあった。

「やれやれ、今日はもう駄目かな……」

俺は机に頬杖をつき、窓に打ちつける雨音を恨めしく聞きながら、つぶやいた。

自己紹介が遅れたが、俺の名前は榊原保（さかきばらたもつ）、三十二歳独身。この町で鍼灸（しんきゅう）と整体の診療所をやっている。自分で言うのも何だが、結構腕はいい方だと思う。研究も熱心にやっているつもりだし、年に一度は修業のため、本場の中国やインドに渡って、技術の向上に努めている。

そんな訳で、去年やっと開いたこの小さな診療所も、どうにか軌道に乗りつあるのだった。

だが鍼（はり）や整体のお客というのは、大半がじいさん・ばあさん連中と相場が決まっていたから、こんな足元の悪い雨の日に、わざわざ外を出歩いたりはしない。客足は午前中に数人が訪れて以降さっぱりで、待合室はしんと静まり返っていた。いい加減、休診の札でも出してやろうかと思ったその時、ドアの呼び鈴がチリンチリンと鳴り響き、客の訪問を告げた。

やって来たのは、近所に住む高校生、伊藤彰人（あきと）君だった。彼はうちの常連で……というのも、彼は学校の陸上部で棒高飛びをやっており、しかもかなり有望な選手らしいのだが、去年の暮れに練習で腰を痛めて以来、治療のために定期的に通って来ているのだ。一回り以上歳が離れているくせに、どういう訳か気が合って親しくなり、近頃は学校や家庭の事など、プライベートな話までする間柄になっていた。

しかし、今日は彼の診療予約は入っていなかったし、最近は治療の甲斐あって、もう一息で完治という所まで

来ていたのだが、どうした訳か表情が暗い。

「先生、やっちゃいました……」

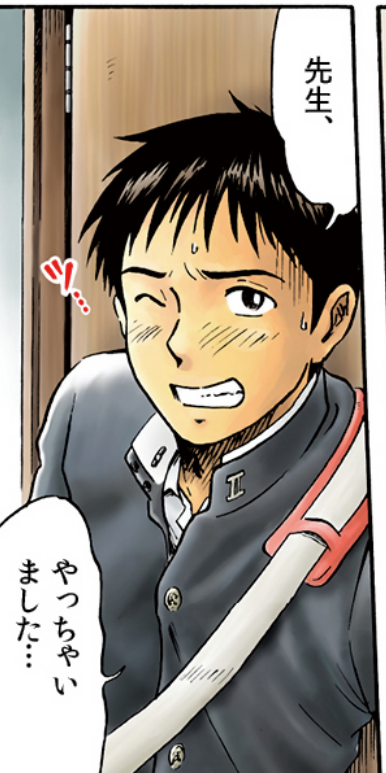
訳を尋ねると、朝のラッシュで誰かにぶつかられて、駅の階段から転げ落ちてしまったのだという。その拍子に、痛めていた腰をひねってしまったらしい。どうにか学校へは行ったものの、痛みに耐え切れず、午前中で早退してきたという。

「来週、地区予選があるんです。それまでに何とかなりませんか？」

しかし痛がる様子を見た限りでは、それはとても無理なように思われた。きっとその大会を目指して、一生懸命調整を続けてきたのだろう。彼の失意の表情に、慰める言葉も見つからなかった。

だが、そんな感傷に浸っている場合ではない。患者にできる限りの事をするのが、俺の仕事だ。

気を取り直して、診察を始める事にする。服を脱いで診察用ベッドに横になるように言うと、彼は学生服を脱ぎ、ボクサーパンツ一つになって寝そべった。



相手が彰人君だと、さすがに俺も、平静を保つのに苦労をする。将来有望なスポーツ選手だけあって、いい身体をしている。決して筋骨隆々というのではなく、むしろ陸上選手らしく細身な部類だったが、無駄のない柔軟な筋肉が、バランスの良い骨格を覆っていた。

そのくせ、整った上品な顔にはまだあどけなさが残っていて、「ギリシャ彫刻のアポロン像のようだ」といつも思う。キメの細かい肌には、去年のランニングシャツの日焼けの跡が、まだうっすらと残っていた。

……ここまで話してわかってしまったと思うが、実は俺はゲイなのだ。

中学生の時分から薄々自覚はあったのだが、高校に上がってからは、知らず知らずの内にクラスの男友達の姿を追いかけている自分の視線に気づき、悩んだりした時期もあった。失恋に終わった初恋やら色々あったけれど、今はもう、そういう自分に納得している。いいじゃないか、人を好きになる事が、悪い事であるはずはないんだと、自分に言い聞かせている。

だが、ここで誤解して欲しくないのは、俺は仕事とプライベートは、はっきり区別しているって事。そりゃあ、今は付き合っている相手も居ないし、欲求不満が募る事もあるが、患者に接する際には、医療従事者として恥ずかしい事は、何一つした覚えはない。マッサージで肌に触れる時だって、頭の中は治療の事以外、一切考えていないつもりだ。

まぁ、今回は思わず不覚をとってしまった訳だが、(俺だって生身の人間なんだから、しょうがないだろ?)、すぐに雑念を振り払い、診察を開始した。

彰人君の腰の状態は、俺が思っていたよりもはるかに悪いようだった。軽く触れただけで、激しい痛みに顔を歪めた。

これでよく一人で帰って来られたもんだ。彼は本当に我慢強い性格なのだろう。この調子で苦しい練習にも励んできたに違いない。そう考えると、余計やり切れない思いに支配される。

「先生、どうなんですか?」

不意に尋ねられて、俺は一瞬動揺した。だが隠したってどうにかなるものではない。この患者には、絶対安静が必要だった。

「残念だけど、大会は諦めるんだな。コルセットをして、ひと月は動かさないようにしないと、一生治らなくなるぞ」

「そんなっ……!!」

あの痛みにも耐えた彼が、うっすらと目に涙を宿している……思わずこっちも貰い泣きをしてしまいそうだ。

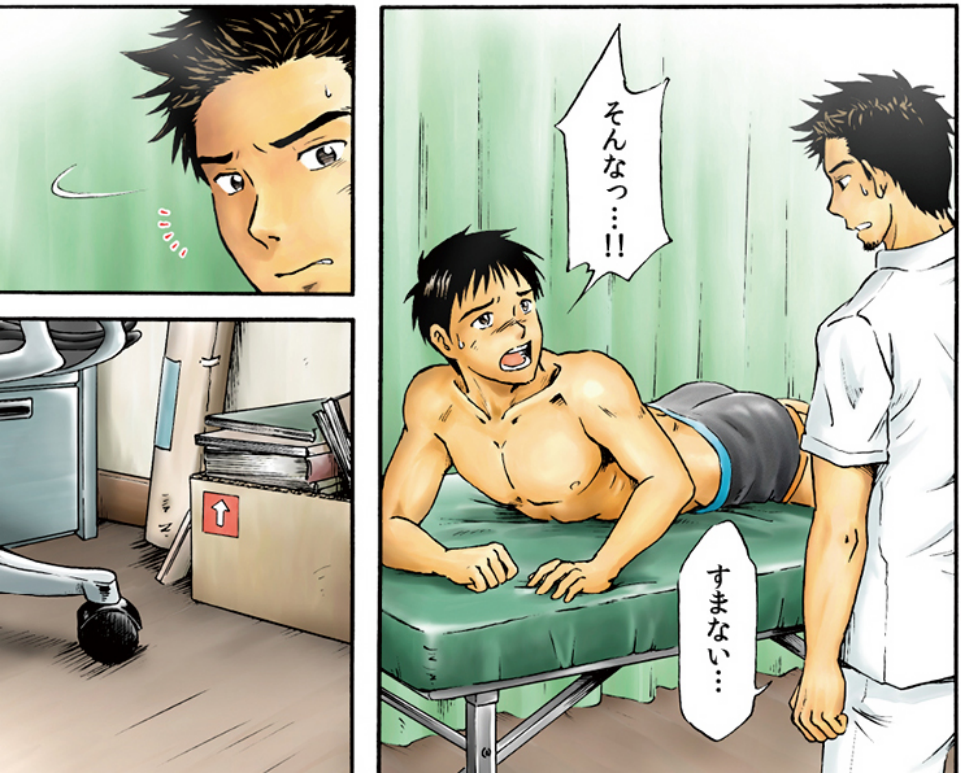
「本当にどうしてもダメなんですか!?」

彰人君が哀願する。

「ああ……どうしたってそんなに早くは治せないよ。すまない」

俺はうつむき加減でそう言うのがやっとだった。彼が本当に泣きだしてしまうのではないかと恐れて、彼の視線から顔を背けた。

その時、ふと床の上に山積みになっている、古い本の一冊が目に飛び込んできた。



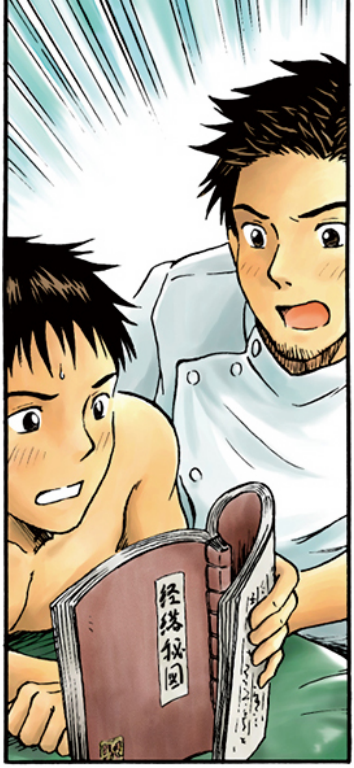
それは先日、中国へ行った折に買い集めてきた、昔の鍼に関する古書の一冊だった。

「まてよ？　確かあの中に……!!」

以前、ざっと読み飛ばした時に見つけた、今ではもう使う者のいない、秘伝の鍼治療に関する記述を思い出したのだ。俺は夢中で古書をめくり、ついにその箇所を発見した。

「あったぞ!!」

思わず歓声を上げて振り向くと、何が何やらわからない彰人君が、怪訝な顔をして俺を見つめている。駆け寄って、彼にそのページを示して言った。



「ほら、これは昔の中国の鍼の名人が書き残した秘伝書なんだ。ここに腰痛の治療に関する事が書いてある……」

彰人君は、急に希望を取り戻したようで、

「先生、一体なんて書いてあるのか教えてよ！」とせっついてきた。

だが書物は当然漢文で、しかも昔の文体で書いてあるため、なかなか読み進むのが難しい。もちろん俺は、漢文に関しても勉強はしているのだが、古語ともなると、さすがにわからない部分が出てきてしまう。

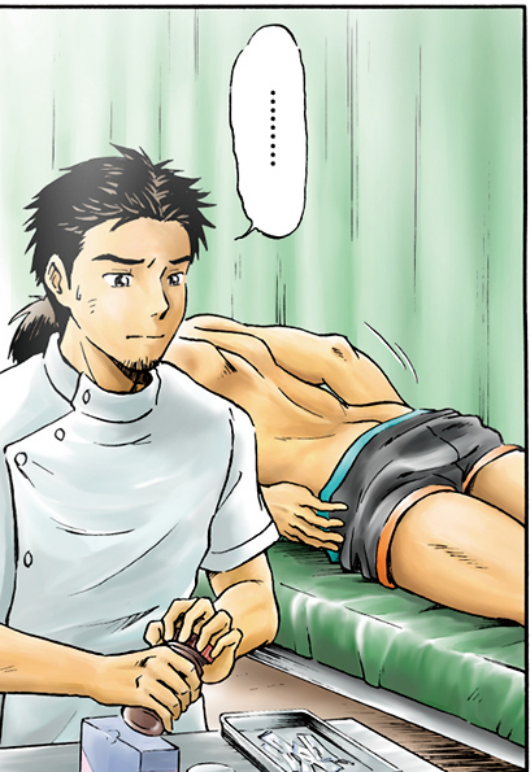
「え～っと、何々……『腰痛で、長年歩くこともままならない者に、この秘伝のツボを使った鍼治療を施(ほどこ)した所、翌日には跳ね回って歩くことができた』……とまぁ、そんな事が書いてあるな。う～ん、その先は難しくて読めないなぁ。こりゃ時間をかけて解読しないと、正確に読み解くのは難しいかも……」

「そんな……。先生、そのツボがどこにあるのかは、わからないの!?」彼は必死だ。

「こっちに図解があるから位置はわかるけど、これだけ

じゃ鍼を打つ訳にはいかないよ」
「構いません、やって下さい!!」

俺は正直、マズイ事になったと後悔した。彼の心に再び希望の灯をともしてしまったらしい。
だが前途ある高校生に、こんな得体の知れない治療を試す訳にはいかない。人体実験もいい所だ。俺が首を縦に振らないでいると、彼はなおも食い下がった。
「先生、俺はこの半年、必死でリハビリしてきたんです。このままじゃ、今までの努力が何だったのか、納得できません!!」
俺はしばらく考えた末、おもむろに現在の鍼のテキストや、西洋医学の本を引っ張り出した。
古書に載っていた『陽精中』という鍼のツボは、背骨の下方より2番目の骨の両わきに、一対と示されていた。やや神経に近いが、取り立ててどうという事のない、小さな筋肉の隙間である。
もちろん、そんなツボがあるなどという事は、どのテキストにも載っていなかったし、西洋医学に照らしてみても、何かが起こるとは思えなかった。〈特に問題もなさそうだが、効果も期待できないだろう〉そう思うと、安心半分、しかし彰人君の儚い期待が、再び水泡に帰すだろう事に、暗い気持ちになった。
振り返ると、必死に俺の表情を読み取ろうとする、彼の眼差しにぶつかった。俺は覚悟を決めて言った。
「……試しても、効果はないかも知れないよ?」
彰人君の顔がパッと輝いた。
「ありがとうございますっ!!」
ほとんど見込みのない望みに、俺は小さく溜息を漏らすと、治療の準備に取り掛かった。



彰人君を再び診察台に寝かせると、鍼を取り出し、それに漢方薬を塗りつけた。この漢方は、俺の調合したオリジナルで、温熱作用があり、鍼の効果が長持ちするといって評判のものだ。

彼の背骨をたどり、『陽精中』のツボを探す。

それはちょうど、ボクサーパンツの腰ゴムの辺りだったので、少し下着を下ろしてくれるよう、頼まなければならなかった。

彼は少しはにかんだ様子だったが、素直に指示に従ったので、半ケツを俺の視界に晒す事になった。何とか尻の穴がぎりぎり隠れるくらいの位置。もし今、彼を仰向けにしたら、黒い草原の一端が覗いているかも知れない。

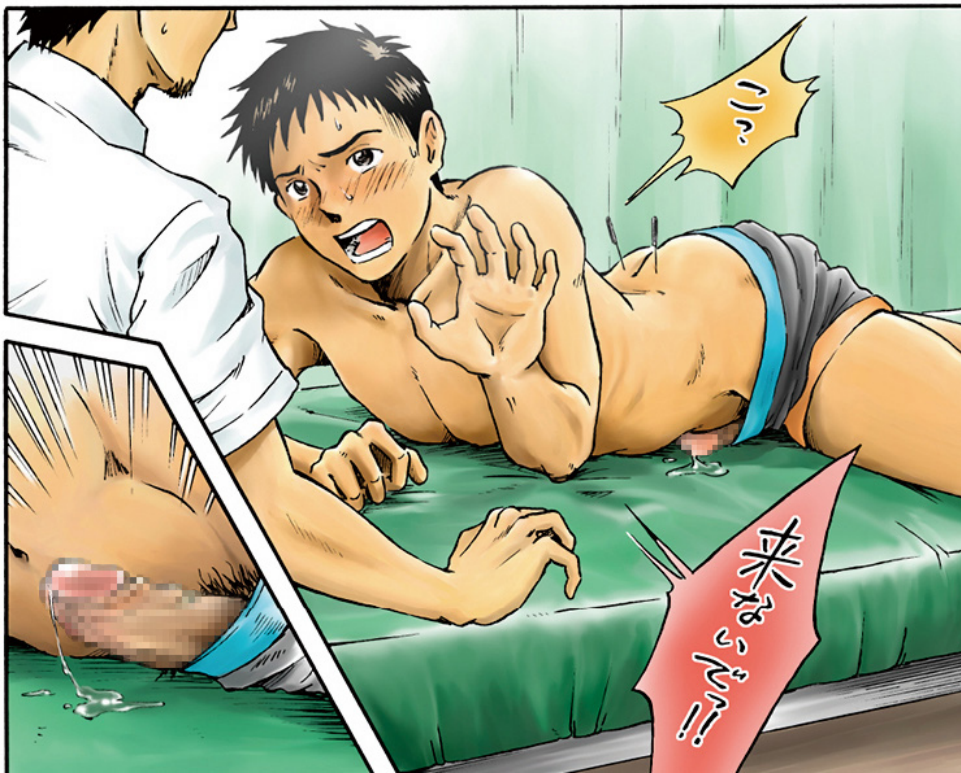
もちろん下心があってそんな事をさせた訳ではなかったが、俺は自分の股間が少しばかり疼くのを感じてしまった。あわてて〈今はそんな場合じゃない！〉と自らを戒める。

ツボに狙いを定めて鍼をあてがうと、人差し指でストンと打ち込んだ。狙い通りの場所に入ったと思ったその時、「ああっ」という声が診察室にこだました。

「痛かったのか!?」驚いて彰人君の顔を見る。
痛みがあるはずはなかった。神経は通っていない所だし、彰人君には、今まで何度も鍼を打ってきたから、鍼が皮膚を突き刺す刺激には慣れているはずだった。彼は苦悶とも焦燥ともつかない表情で言った。
「……痛みとは…違うんですけ…ど、何か変な…感じがして……」
どうしたというのだろう？　呼吸や動悸は速く、頬はほんのり桜色に上気している。
「違和感があるのなら、やめておいた方がいい。何かあったら……」俺の言葉を遮って、彼が喘ぎながら言う。
「続けて下さい……そういうのとは…違うんです」
何が違うのだかわからなかったが、俺は恐る恐るもう一対のツボに鍼を打ち込んだ。
「あはっ…!!」再び彼が発した。
慌てて口を塞ごうとしたが、間に合わなかったらしい。彼の言葉通り、痛みから発されたものではないようだったが、一体何が起きているっていうんだ。
「本当に大丈夫なのか？」
俺は不安になって尋ねたが、彼は顔を伏せたまま頷くばかりだった。
「じゃあ、十五分くらいそのまま様子を見よう」
仕方ないので、そう言うと俺は、机に向かってカルテを書きながら、彼の様子を観察することにした。
時々顔を上げて、彼の状態を確かめる。
相変わらず腕に顔を埋めていたので、その表情を窺う事はできなかったが、身体の方は何らかの反応を示しているようだった。呼吸や動悸は相変わらず速いようで、肌も汗ばみ、しっとりと濡れ始めていた。
俺は不安な気持ちを鎮めようと、思い当たる原因を探った。〈昨日調合した漢方が強過ぎたのかも知れない。あれは温熱作用があるし、今のような症状を引き起こす可能性も、有り得なくはない……〉
そんな風にあれこれ推察していると、今度は彼がモゾモゾと動き始めた。体をよじったり、腰の辺りを浮かせたりしているようだった。
たまりかねて俺は席を立ち、声をかけた。
「おい、どうかしたのか？」

だが返ってきたのは意外な答えだった。
「だ、大丈夫ですから…来ないで…下さ…い」
何だって？　こりゃどう考えても普通じゃない！
「おい、顔を上げろ。気分が悪いのか!?」
「こ、来ない…でっ……!!」
彼が顔を上げ、近づいてきた俺を制止しようとした瞬間、彼の身体と診察台の間にできた隙間から、思いもかけないモノが俺の眼に飛び込んできた。

それはボクサーパンツから顔を覗かせている、彼自身だった！
勢いづき、すっかり雄たけびをあげてしまっているそれは、形の良い雁首から透明な雫を診察台に落として、長く糸を引いてさえいた。半ばずらした下着のゴムに締めつけられ、浮き上がる血管がドクドクと脈打つ様子まで、はっきり見えてしまった。モゾモゾと動いていたのは、こいつが原因だったらしい。
……だが、どうしてこんな事に!?



サンプルはここまでです。
続きは製品版をお求めください。